

詩集

心の扉

小杉 匠

「脱力」

昼下がり

部屋に寝転んで

ぼんやりと物思いに耽る

そんなひとときが好きです

開け放った窓の向こうから

柔らかな陽光と

穏やかな風

それを この身体に浴びながら

心を空っぽにするのです

何をするでもなく

何を思うでもなく

きっと どうでもいいことなのです

それが何の為であろうと

自分が一体何者であろうと

私はこの世に生を受け

今日まで 生きてきました

そして この「今」という時間が

とても愛おしいのです

仰向けになると

澄み切った青空が

私の視界に

飛び込んできました

それで 十分ではないでしょうか

「心の声」

あの日

僕は東へ急いだ

新しい生命が僕を呼んでいた

何をするでもない

ただ懸命にそのときを生きること

すべてが輝いてたあの頃

あれから

何が変わったのだろうか

何か変わったのだろうか

あの日産まれた雛は

見違えるほど立派になった

そして僕は

なぜか卑屈になった

僕は心の声に耳を澄ませる

僕は心の眼で周囲を見渡す

「元気出せよ」

そう言ったのは 僕自身？

それともすくすくと育ったかつての雛？

「素直な心で」

大丈夫かい？

(大丈夫に見えますか？)

顔色が悪いじゃないか

(そうでしょうね)

元気出せよ

(出ないから困ってます)

飲みにでも行くか！

(いつもの決めぜりふ...)

地下鉄の駅を降り 小雨降る中 家路へ急ぐ

誰も待っていやしないのに

交差点 赤信号で立ち止まる

急いでも仕方がないのに とても苛立つ

やがて 柔らかな青緑色の光が灯り 僕は歩き始める

大丈夫かい？

顔色が悪いじゃないか

元気出せよ

飲みにでも行くか！

僕は横断歩道の真ん中で立ちすくんだ

心がぼきっと折れた音がした

大丈夫です

心配をおかけしてすみません

元気出します

お供します！

明日 そう言おうと心に決めて 僕は再びゆっくりと歩き始めた

青緑色の光が 僕にウインクしている

その色が赤に変わる前に 僕は横断歩道を渡りきった

「思い出は常に色褪せず」

いつかまた
人恋しくなったら
いつでもおいで
そう言ったよね

僕は幸せをかみしめながら
君達と固い握手を交わした
それが終わりなのか
始まりなのかさえ知らずに

すべては時の流れ
思い出は常に色褪せず
僕の胸を熱く 熱く
駆け巡っているのさ

嗚呼 君が呼ぶ声がする
また会えるかな
会いに行こうかな
あの日のように

新たな時を刻みに

「ひとつ」

ひとりよりふたり
ふたりよりさんにん

ただ単に群れる訳でなく
力を合わせ
一緒に何かを祈り
共に知恵を絞り
皆で何かを成し遂げ
一丸となる
ひとつになる

何かを生み出したとき
喜びは2倍にも 3倍にも
ハイタッチする掌の数が多いほど
笑顔も幸せも数え切れないほどに

孤独を愛する僕も
だから仲間が必要なのだ

ひとりよりふたり
ふたりよりさんにん
みつつよりふたつ
ふたつよりひとつ

「家族って」

手際よく髪を結う君
慌ただしい朝のひと時
僕は君の姿に隠れ
鏡にすら映らない

君が「邪魔！」と言えば
従うほかない僕
この家の大黒柱
限りなく小さな居場所

ああ 家族って
お互いに素を曝け出すもの
憎まれ口も 嘆き節も
すべて受け止めてあげよう

この家は
とても小さな空間さ
狭い分 距離が近く
幸せの密度が濃いんだよ

君達がここを卒業するとき
ぽっこりあくよ
大きな穴が
きっと

それまで 僕は生き続ける

「キセキ」

澄み切った青空に
僕は奇跡を見た

貴方と出会ったキセキ
すべてが順調すぎるキセキ
今日この場に自分がいるキセキ
この世に自分が産まれてきたキセキ

奇跡はいつも当たり前のよな顔して
僕らの前に現れる

どんな些末なことも
ありえない出来事
そして
当たり前の出来事

僕は芝生に寝転び
あの雲を眺め思う

僕は貴方と出会うべくして会い
来るべくしてここを訪れ
当然のように この世に生まれ落ちた

すべては筋書きどおり
そうなんでしょう？
お返事は結構です
当たり前な顔しててくれればそれで

「回想」

人は重ねた歳月に応じて
輝きの色や調子を変えて行くもの
そんなことは分かっているし
今の自分も自分らしく
輝いていると思っているけれど
望んでも、抗っても
帰ってこないものがある

君にあるその若さが放つ輝きは
僕にはもはや手に入らないもの
君のその一瞬一瞬の輝きを
少しでも多く見届けていたいんだ

跳べ もっと高く
走れ 誰よりも速く
歌え 声の続く限り
奏でろ 誰よりも美しい音色を

何をするのも、失敗するのも許された
すべてが碧かったあの頃
思いを馳せ
勝手に君にだぶらせ
僕は心の限り応援するのさ
あの頃の自分を

「ねえ 誰か」

ねえ 誰か知ってるかい
アイツを止めるスイッチを
うるさくて いじわるで
口やかましくて えこひいきで
仕事になりやしないじゃない

黙らせて 追い出して
できることなら 遥か遠くへ
俺の視界から消して
ねえ 誰かやってくんないかな

こんなんじゃ こんなんじゃ
やってらんないじゃない

いつも我慢してるけど
気が付いたら
10円ハゲができてる
根くらべの毎日

逃げ出すのは簡単さ
俺は負けずに この場所で
成し遂げてみせるさ

アイツはいつになっても
分かった風な顔した
何も知らない裸の王様
ねえ 誰か教えてやってくれよ

「天声」

澄み切った青空の中で
赤子でも優しく抱きしめるかのように
もこもこに膨れ上がった雲

その隙間から
柔らかな光線が
僕の頬を射抜く

そして 心穏やかにあれと
僕に警告するのだ

昨日の幸せに浸りつつ
今日はもっと幸せなお前であれと
僕の心に迫るのだ

明日がお前にある保証なんて
どこにもないのだぞ

取るに足らぬ感情の起伏に支配され
無意味な時間を過ごしてはならぬ

すべての言葉と行動に
生命を吹き込み
全身全霊をかけて
人の世というやつと向き合うのだ

納得した最期を迎えるためにも
今を懸命に生きよ
そうだ 今を生きるのだ

「我思う」

君にとっての幸せとは？

そう問われてハタと思考停止する

今まで盲目的に 幸せな日々を送ってきたはずの自分
気付けば それが何なのかよく分からない

出世欲 名誉欲 金銭欲 物欲

いずれも私には断じてない

では 何を求め 何を目指し 生きているのだろう

家族や仲間と笑顔で暮らしたい

何でもいい 何かを創り出したい

答えは意外とシンプルなのかもしれない

欲のない奴

そう思われてもいい

変わった奴

むしろそう思われたい

たまに会って話してみたくなるおかしい奴

そんな輩でいたいのだ

「もっと強くあれ」

僕達が産まれた郷里
かつて焦土と化した街
久々に降り立ったこの地で
風の音に 川の流れるに 耳を澄ませ
大地に その掌を そっとあててごらん

ドクン ドクン ドクン

強い生命のシグナルが波打つ
この遥かな大地に思いを馳せ
その生命力の強さを思う
そして我が身の小ささを知る

大地は僕に語りかける

もっと強くあれ

胸に突き刺さる この言葉
多くの人々の優しさに守られ
何とか生き永らえる 今の自分
郷里のDNAを僕は失ったのだろうか

もっと強くあれ

大地は何度も何度もそう語りかける
僕の足下から 僕を見下ろすかのように

「師」

師が問う

お前は何の為に筆をとるのか

私は黙す

そこに理由などないからだ

単なる感情の捌け口

ならば それでよいではないか

誰に迷惑をかけるでもない

刻まれた言葉が 私の分身としてそこに宿る

名を成したい

大作を仕上げたい

人々に読まれたい

そんな誰かに媚びるような

子供じみた動機ならば

私は筆などとらない

真に価値ある文字が刻まれていれば

いつの日か誰かの目に止まることもあろう

師よ

あなたは全能ではない

私と同じ愚かな人間なのだ

「己に非ず」

風

淋しさを紛らす

僕の中にいる僕は僕じゃなくて

何を求め 何を悩み

心を喰らう

水

渴きを潤す

疲れ切ったその顔は僕じゃなくて

誰を映し 誰を生かし

流れ行くのか

空

すべてを包む

君の傍にいるべきは僕じゃなくて

誰を愛し 誰を傷付け

高みに向かおうか

夢

儂く消える

きっと描くべきは僕じゃなくて

何を信じ 誰とともに

心を砕こうか

「四行詩」

ふとした瞬間に

我に戻る

時は移ろう

我が想いは永遠なり

心の扉

<http://p.booklog.jp/book/73314>

著者：小杉 匠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cosgy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73314>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73314>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ